

「コミュニティナーズってなんやろ？」 ケアするローカル研究所 in くるめ DAY4 開催レポート

2025年8月のDAY0プレ企画を開催して約半年、全5回にわたって、ローカル（地域）にある「ケア」を探求していく「ケアするローカル研究所 in くるめ」。早いもので、今回でもうDAY4です。1月16日（金）に久留米シティプラザのスタジオ2をお借りして、ケアするローカル研究所 in くるめのDAY4が開催されました。からだの芯から冷えるような寒い1日でしたが、会場はぽかぽかと温かい雰囲気と笑い声に包まれていました。



今回会場となった「久留米シティプラザ」は、久留米市中心部（六ツ門地区）にある複合文化交流施設です。コンサートなどもできるホールも併設されていて、大きな綺麗な施設でした。

前回のおさらい

「ケアするローカル研究所」は、久留米市の地域福祉課による事業の1つで、参加者さんがローカル（地域）のなかで「ケアってなんだろう？」を探究しながら、それぞれの小さなアクションやはじめの一步を踏み出すきっかけの場としてスタートした企画です。

前回DAY3は、12月8日（月）にJR久留米駅の近くにあるヘアサロン「余韻」で開催されました。宮崎県三股町からお越しいただいた松崎亮さんより話題提供をいただき、居場所づくりに繋がる活動、そしてそこでの交流から見えた地域課題の解決に取り組むさまざまな活動やイベントをご紹介いただきました。松崎さんのお話のなかでは、地域の中でプロジェクトを始動し継続していく心構えやTIPs（コツ）

もいくつか紹介されていました。現にさまざまなケアに関するイベントを企画中の参加者さんには次の一歩につながる時間にもなったのではないのでしょうか。

DAY3の詳細は以下の記事をご覧くださいと思います。

<https://note.com/coconiaru/n/nb518c7b3982b>

そして、今回 DAY4のトークテーマは「コミュニティナース」です。現在、六本松を活動の拠点とするコミュニティナースの小松亜矢子（こまつ・あやこ）さんを会場にお招きしてお話しいただきました。聞き手は「株式会社ここにある」の代表取締役である藤本遼（ふじもと・りょう）さんと「株式会社つくるのわデザイン」の岩本諭（いわもと・さとる）さん。

今回のテーマは、DAY3の松崎さんのお話のなかで登場した「縁のつくり直し」、社会の無縁化に伴って拾いきれなくなった地域の困りごとを拾えるような「居場所づくり」にも繋がるものなのではないかと思っています。それでは、DAY4当日の小松さんのお話の内容と参加者さんの様子をレポートしていきます。

そもそも「コミュニティナース」ってなんやろ？

小松さんのお話はまず、そもそも「コミュニティナースとは何か」という紹介からスタートしました。「コミュニティナースを知っている人ー？」と会場に聞いてみると、知っている人は6人程度。会場にいる参加者さんの多くが今回初めて耳にする概念のようでした。小松さんはコミュニティナースについて、以下のように説明していました。

「コミュニティナースとは、” 人とつながり、まちを元気にする ” ための実践のあり方です。まちの中にある、誰かに必要なものや場所と人をつなぐようなコーディネーターの役割をしたり、誰かの ” これやってみよう ” を一緒に叶えるお手伝いをしたりするような関わり方や行為をまるっと「コミュニティナース」と表現しています。」

こんな2人でやっています

じゃない方担当

足柄 佑貴
(あしがら ゆうき)

“再生”をあらゆる角度から
問い続ける思想担当コミナス

- ・ 看護師
- ・ 保健師
- ・ 社会教育士
- ・ 現役パティシエ
(絶品カヌレを作ります)
- ・ 自然観察指導員
- ・ 課外活動に勤しむ自由人
- ・ 琵琶を習い始めました



ちゃんと担当

小松 亜矢子
(こまつ あやこ)

“小松さんに相談したら
なんとかなりそう!”
と思わせてくれる安心感
頼れる姉御コミナス

- ・ 看護師
- ・ ソーシャルワーカー
見習い
- ・ 1児の母
- ・ 足柄さんの手綱を握る
たねばこの守り人

今回登壇してくださった小松さん（右）と一緒に活動する足柄さん（左）
この二人で、六本松を拠点としたコミュニティナースの活動をされています！
お二人の笑顔やスライドの表現から仲の良さが伝わってきました。

コミュニティナースって、「ナース」と名付けられているため、看護師や医療従事者のみが行う活動なのかと思いきやそうではないんですね。なんらかの資格や役職ではなく、存在の仕方や行為自体を指す言葉なんです。そして小松さんはたまたま看護師ですが、看護師でなくても誰にでも実践できる関わり方でもあるようです。話題提供のなかで、コミュニティナースの養成や活動の発信を全国的に行っている島根県雲南市の「Community Nurse Company (現・CNC)」の代表取締役の矢田明子（やた・あきこ）さんのご紹介もありました。

矢田明子さんの著書『コミュニティナース』

(全国で活躍するコミュニティナースの活動事例が取り上げられています！)

<https://community-nurse.jp/1392>

「誰かにとって必要なものや場所と人をつなぐ」「誰かの ” これやってみよう ” を一緒に叶えるお手伝いをする」といった関わりや行為を改めて「コミュニティナース」という言葉で定義することによって、それまで身近な場で当たり前のように目にしていたからこそ気づきにくかった小さな ” おせっかい ” の価値を、「それって誰かを元気にするいいことなんだよ」と可視化することにつながったのだ、と小松さんは言います。そして地域のなかに入って活動してみたいけど地域への入り方がわからない、そんな専門職の背中をそっと押してくれるような力にもつながったのだとも話されていました。

コミュニティナースの実践の仕方は人それぞれ、地域によってもさまざま。個人のボランティア規模の活動から、病院や企業も関わった大規模な活動もあるようです。小松さんのスライドの中でコミュニティナースの活動をいくつかご紹介されていました。なかでも印象に残ったのは、「長いしゃもじ」のお話と、「村に1つしかないガソリンスタンドで健康相談室」のお話。「長いしゃもじ」は、コロナ禍

で一緒に食事することがなかなか難しかった頃に、ソーシャルディスタンスの距離を測る2mのしゃもじを実際につくったというお話（笑）。思わずくすつと笑ってしまうユーモアがいいですね。「村に1つしかないガソリンスタンドで健康相談室」のお話は、矢田明子さんの『コミュニティナース』でもご紹介されている、奈良県の山添村のガソリンスタンドの一角を使って健康相談室を行っているお話でした。車が必需品である地域では、ガソリンスタンドは必然的にまちの人が集まる場所であり、まちの人とつながれる場なんだとハッとさせられました。



村に1つしかないガソリンスタンドは、みんなが自然と集まる場所。そこに健康相談室を作るアイデアは素敵。「エバラいます」の荏原（えばら）さんのお話は矢田明子さんの著書『コミュニティナース』にも登場しています！

そんな全国各地で展開されているコミュニティナースの活動の紹介とともに、「95%ルール」というワードもご紹介されていました。95%ルールとは、「コンパッション都市」という書籍の中で触れられているもので、専門職と過ごす時間（つまりはフォーマルケアに触れる時間）は1日のうち5%程度で、それ以外の95%の時間は1人でいたり、家族や友人と過ごしたりしている、ということでした。この95%の時間を充実させるためにコミュニティナースが地域には必要、と小松さんは考えているそうです。小松さんが実際に体験したのは、すでに担当のヘルパーさんやケアマネさんのいるおばあちゃんについて。医療福祉の支援の目が入っていないおばあちゃんの「95%の時間」を見ていた身近な人たちが、「最近、忘れっぽいし転びそうになっているのが心配」と小松さんに相談してきたそう。その相談を受けて対策ができて、何事もなくおばあちゃんは日々を過ごすことができたそう。身近なつながりをつくっていくためにも、コミュニティナースは必要なんだと小松さんは改めて感じたそうです。

横須賀での苦労や課題

コミュニティナースの紹介のあと、小松さんの活動のお話を順にご紹介いただきました。まずは横須賀市にいらっしゃった時のお話。人口減少が目立つ（2013年には人口減少数が全国1位となったそう）

横須賀市にてコミュニティナースの活動をスタートした小松さん。まちの人も地域のつながりをどうつくっていくかのアイデアを練っている段階だったので、小松さんの活動もそこに交わっていきました。

その時は、地域のおばちゃんたちがはじめた昼間の居酒屋さんの場所を利用したコミュニティカフェ（今は「サンカフェ広場」という店名になっています）や、子供や若者向けの居場所づくりを意識した私設図書館で活動していたそうです。図書館の館長さんと、当時コロナ禍にまちで話題に挙がった「生理ナプキン貧困」に対してなにかできないか、と周りの人に「生理ナプキンを集めて困ってる人に配ろう！」と声かけをしたところ、現金やナプキンがかなり集まったという経験をしたそうです。

参加してくれた人のなかには「地域のために何か力になりたいけれど、大きなことをする勇気はなかった。これくらいなら関われそう。」という声もあったそう。” 地域のためになにかしたい ” と思いつつそのきっかけを探している人が多くいることに気がついた小松さんは、「そのきっかけづくりをコミュニティナースとしてできたらいいのでは！」 と思ひます。



地域の方と「もしバナゲーム」をやっている様子。

活動を続ける中で横須賀市役所はじめ、まちの人からの注目や声かけが増えて、コミュニティナースの活動は一見順調に進んだように見えたが、実は、活動をしていた小松さん自身は活動の継続に悩んでいたそうです。

「まちの人にとって必要だと思ってはじめた活動ではあったんです。でも私自身が元々、カフェに来て初対面の人と交流するのは得意ではなかったので、私にとってこの場（カフェ）は心地よい場所ではないな、ボランティアベースでこの活動を継続していくのは少ししんどいな、と思うようになりました。地域から必要とされ、注目も受けていたからこそ、自分の気持ちとのギャップにもしんどくなってきました。」と小松さん。そのほかにも、自分の活動に共感して集まってくれた仲間と自分の熱量の差や、資金確保（市の補助金だけでは継続難しかった！）の面、仕事と活動の両立など、悩むことの多かった時期だったそうです。

六本松を拠点にコミナス活動を本格始動！

時は流れ、拠点は福岡県の六本松エリアへ。訪問看護ステーションでの勤務を経て、2024年7月より西部ガス株式会社のプロジェクト専従コミュニティナースへ就職した小松さん。足柄さんと一緒にまずは、六本松421というビルの一区画に「まちの保健室」を構え、そこを拠点に活動をはじめました。まずは自分たちの活動を知ってもらおうと、イベントや本の読み聞かせ、座談会などを行ったりSNSアカウントをフォローしてもらったりしたそうです。子ども連れの親子が立ち寄り、場は和気あいあい。しかし、その拠点となった一区画は期限付きで借りていたため、その後は出張スタイルに切り替え、活動を継続しました。出張先はスポーツクラブやカフェの一角だったり、公園だったり、なんと映画館のなかだったり・・・。ツアーを組んで科学館の展示を巡る企画をしたこともあったようです。

そんな出張も継続したのちに、2025年6月に、現在の六本松の常設拠点「まちの保健室 たねばこ」がオープンしました。たねばこは、休憩したり相談したり情報交換したりと、まちの人が自由に利用できる場として開かれました。平日の日中に開かれていることもあり、親子連れやシニア層の利用者さんが多いようでした。

「たねばこ」の詳細は下記note（公式）をご覧ください。

https://note.com/sgcnpj_rpm/n/n0b6c7754e81e?sub_rt=share_sb





2025年6月 たねぼこオープン！！

手前ではシニア層の利用者さんが相談したり、奥では親子連れの利用者さんが交流していたり。

たねぼこにまちの人が訪れておしゃべりしたり、足柄さんと琵琶（楽器）の練習をしたり、パエリアをつくりたい子どもと一緒に企画を練ってみたい。逆にたねぼこ自体が出張して、”場”をつくっていきたり社会福祉協議会が主催するイベントに協力したり、公民館へ活動の講演をしに行ったり。鍼灸師さんがお子さん向けのイベントをやってみたり、お菓子の販売やマルシェをやってみたい方がこの場を使って挑戦してみたり。たねぼこの場が、訪れた人を元気にしたり、「やってみたい」を応援する場になっていたりしているのが印象的でした。

つながってもいい、つながらなくてもいい

足柄さんのまちの中でのフィールドワークのお話もありました。特に印象的だったのは、足柄さんが、腰痛で農作業ができなくなったまちの住民さん（おじいさん）の個人宅を訪れて、畑を借りつつお手伝いをしたというお話でした。それまで腰痛もあり外に出ることがあまりなかったおじいさんでしたが、足柄さんの活動をきっかけに他の人へも畑を貸し出すようになり、地域とのつながりが生まれたそうです。

「今回は、こういうつながりが生まれたんですが、私たちとしては”つながってもいいし、つながらなくてもいい”と思っています。つながりを通して、みんなで楽しいことをやってみたり、日々の潤いが豊かになったりすることも大事なんですけど、人それぞれのタイミングがあるし、交流することが苦手な人もいると思うので、そういう人たちのことも忘れずに活動が続けていけたらなと思っています。」と小松さん。

彼女は「”安心して孤独でいられる社会”という、川崎市で暮らしの保健室をされている西智弘（にし・ともひろ）さんの言葉を大切にしています。1人になっても大丈夫だし、なにかあった時は「このまちなら誰か助けてくれる」と思ってもらえるようなまちにできたらいいなと思っています。」

小松さんからの話題提供が終わり、参加者さん同士で小グループに分かれ、感じたことや新たな発見、感想についてシェアしました。「コミュニティナース」という概念や活動を初めて耳にした参加者さんも今回多かったように思います。わたしが参加したグループでは、コミュニティナースのイメージを改めて共有したり、身の回りの人で同様の活動をしている人はどんな人がいたかを共有したりしていました。

深掘りタイム



初めて耳にする「コミュニティナース」の活動の幅広さに、参加者のみなさんは興味津々。

全体に戻り、ここからは小松さんへ質問をどんどんしていきました。まずは聞き手の藤本さんと岩本さんから、そして参加者さんから質問をSlido（スライドウ）で募集しました。

ーコミュニティナースってどうなったらなれる（名乗って活動できる）のでしょうか。CNCの講座を受講したらいいのでしょうか。

小松さん：

確かに、コミュニティナースを名乗って活動している人の多くは、CNCの養成講座を受講しています。わたしと足柄さんも、西部ガスとCNCが協定を結んでいる関係で、西部ガス専従のコミュニティナースになるために講座を受講しました。講座で学べることとしては、「地域のなかへ入っていく時のスタンス」だったり、自分の強みや自分がどんな時に感情が動くかを分析する「自分自身の振り返り」だった

り。そうした学びを受けたあとで、講座内で用意された地域のフィールドワークに参加します。実際に現場で地域住民の方とどんな風に関わっていけばいいか、話しかけたらいいかを体感していきます。

岩本さん：

なるほど。もし、地域への入り方のスキルみたいなものがあれば伺いたいです。

小松さん：

そうですね。例えばフィールドワークの最初に、活動するエリア内をとにかく歩き回ることとか。このまちの中の暮らしや生活の動線はどこだろうって探しますね。最初に場を作った時は、その2ヶ月前くらいからまちに入ってとにかく歩き回りました。まちのお店の人と話したり、人が集まりやすい場について聞いて実際に行ってみたり。あとは、まちのステークホルダーになっている人にまちのことを聞くこともしていました。

岩本さん：

なるほど。そういうフィールドワークをはじめるときに、何らかのミッションが事前に与えられているのか、それともまちのニーズや課題を知るために小松さん方が自主的にまちの住民さんに話を聞きに行っているのか、そのあたりはどうですか。

小松さん：

特にミッションもなく、どんな場を作るかの決まりもないので、まちを歩きながら探す感じですね。出張スタイルで場を作っていく中で、やっぱり住民さんがふらっと立ち寄れる常設での拠点があったほうが良いよねとなり、場所を探していたところ、現在のたねばこが見つかりオープンに至りました。

岩本さん：

そうなんですね。西部ガスさんとしては当初は拠点ありきではなくて、コミュニティナースという人材自体を雇用したいというところがプロジェクトの発端だったんですね。では（ミッションなどが無いのだとしたら）、西部ガスさんからのKPI（成果指標）みたいな目標設定などは設けられてなかったですか。

小松さん：

例えば、どれくらいの人に関わったかとか、どれくらいまちの人の声を拾ったか、の目標数値みたいなものはありますね。でも現場のわたしたちからすれば、そこまで数字を意識していません。報告義務はあるので出しますけど（笑）

岩本さん：

それを行政でなく民間の取り組みのなかで行っているのが面白いですね。



ゲストの小松亜矢子（こまつ・あやこ）さん
1つ1つの質問に、丁寧に言葉を選びながら答えてくださいました

ーぶっちゃけた話もしていきたいんですが（笑）、コミュニティナースの関わり方が上手な人と下手な人の違いってなんでしょうか。

小松さん：

わたしの身近な体験による話ですが、「自分の考えを押し付けない・フラットに関われる」人は、関わり方のレベルが高いな～と思います。” 経験からアセスメントして判断する ” 関わり方って、特に看護師や専門職にありがちなんですよ。例えば、病院で目の前に現れる患者さんはなんらかの困りごとを持っているし、それを発見してどうアプローチするかを考えるという関わり方を医療職の方はしていて、それは現場では必要です。一方で、まちの住民の方は必ずしも困りごとを自覚しているわけではありません。そして病院のなかでは見ない事象がまちのなかでは沢山起きていると思います。関わり手の知らない世界がそこには広がっています。その点にどれだけ自覚的にいられるか、かなと思います。

ーコミュニティナースの実践で専門知識（医学知識など）はやっぱり必要？

藤本さん：

なるほど面白いですね。今回の話題提供のなかで、コミュニティナースは医療職でない人も実践できるものだとお話ありましたが、とはいえ専門性、例えば医学知識や福祉領域の知識を持っている方がコミュニティナースの実践はしやすいんでしょうか。

小松さん：

うーん、どう活動するかにもよるんじゃないでしょうか。わたしの場合は「看護職」という強みを活かす形をとってますけど、例えば門司の岡野バルブさんのプロジェクトで活動するコミュニティナースさんは保育士さんなので医療職ではないですし。関わる人によってさまざまですが、「自分の持っている強みややりたいこと」が、関わるまちにどうフィットするか、どう住民の人と掛け合わせていけるか、それをどう活かすかなので。必ずしも医学知識や福祉関連の知識などを持っている必要はないと思います。まちに関わるなかで、そういった知識があった方がいいなと思ったなら、医療職の人を連れてくればいいだけなので（笑）。地域に出てみたいと思っている医療関係者はおそらくいると思うので、そんな方に声をかけたらいいと思います。

藤本さん：

自分が、じゃなくてもいいってことですね。行政に頼んで適切な保健師さんを紹介してもらうなどもできそうですね。

小松さん：

そうそう。大事なのは「（まちの人の声を）拾い上げること」です。自分だけでは対処できないのであれば、適切な専門家をつなげればいいのだと思います。



聞き手の岩本論（いわもと・さとる）さんと藤本遼（ふじもと・りょう）さん

藤本さん：

地域に入るうえで、看護職という専門職からマインドセットを変えていくのはなかなか難しいと想像するのですが、例えば小松さんはどうされているんですか？

小松さん：

そうですね。その点はわたしが現在コミュニティナースとして活動する理由にも関わる部分だと思います。理由をお話しすると・・・元々、わたし自身が困りごとを抱えている人でした。わたしが20代の時に、メンタルバランスが崩れて働けなくなってしまった時期がありました。当時のわたしは孤立してしまっていたんです。実家からも離れた場所で、職場が変わったり、周囲に友人がいなかったり。元々他人に頼ったり相談したりするのが苦手な性格だったので、頼る前にメンタルが崩れてしまったんですね。もっと早い段階でなにかにつながれていたらと思いました。でもわたしにそんなことが起きているというのは、医療機関で働いている方からは見えないんですよ。生活がどれだけ大変か想像できないだろうし、病院にいるときの様子しか見えないんです。わたし自身の場合は、医療の専門職でないマインドの方が強かったから、マインドセットを変えるのは大変ではなかったですね。

岩本さん：

「95%ルール」のお話に関連するところですよ。病院の外にいる時間、95%にあたる場所で生じているまちの住民の「やりたい！」や「困ってる！」という声は専門職の方からすると気付けないことが多くて、ご近所さんや身近な人の方が気づけることが多い、ということですよ。でもその声に気づいた住民はどう背中を押していいのかわからない、となっている。

小松さん：

そうですね、そこを上手く回していくのが、わたしたちコミュニティナースの役割なのかなと思っています。

ーまちの人たちのおせっかいスイッチを押す？

岩本さん：

生活面での困りごと、例えば子どもを預ける、とかちょっとしたお願いごとって、以前は地域のなかで持ちつ持たれつに関わりでなんとかなっていたけれど、今はお金を払ってベビーシッターを雇わないといけなくなってしまっていますよね。地域のなかのつながりが薄れてしまったために、一種のサービス化をしてしまっている部分はあると思うのですが、コミュニティナースの活動やまちの保健室のような居場所があると、こういったちょっとしたお願いを拾っていたりするのでしょうか。

小松さん：

対応ができれば、というところはあるんですが（笑）、わたしたちコミュニティナースだけでなく、そこにいるみんなで、その場に一緒にいる子どもさんと遊んだりその間のお母さんのサポートをしたりしています。ただ、コミュニティナースは「サービスの媒体」になるとは思っていません。サービスでできないところをどう補完するか、を考えてはいますね。

仕事としてやっているのですが、どうしてもサービスっぽくなってしまいうところもあるのですが、コミュニティナースという行為自体は「暮らしのなかにあるもの」なので、普段のちょっとした声かけも、“コミュニティナーシング”のひとつだとは思っています。わたしたちはたまたまそれを仕事としてやっていて、まちの人たちが自然と（コミュニティナーシングを）するように働きかけていく、広めていくために活動しています。

藤本さん：

面白いですね。つまりコミュニティナースはおせっかいを届けてあげるだけじゃなくて、みんなのおせっかいスイッチを押す、みたいなことも仕事としてやっているということなんですね。実際に、まちの人はこちらが見ていてわかる程度にその行動が変化していくものなんですか？

小松さん：

そうですね。うちの拠点（たねばこ）によく来ているおばあちゃんは、「あんた喋り相手おらんのならここに来たらええやん」って知り合いの方をたねばこに連れてきてくれることがありますね。あとは休職中の女性の方で、最初の頃はたねばこに来て本を読んで帰っていただけだったけれど、何回か来るうちに「こういうことができるようになったんです」と胸の内をわたしたちに話してくれるようになった人もいました。そういう変化は少しずつありました。「つながってもいい、つながらなくてもいい」とは言っていましたが、そういう関わりを通して、たねばこがつながっていくきっかけをつくる場になりはじめているかな、とったりしています。



ゲストと聞き手お二人の対話を聴きながら、参加者のみなさんは一生懸命にメモをとっていました

ーコミュニティナースの活動を続けていくなかで、考える ” お金の問題” コミュニティナース × 企業のあり方

藤本さん：

小松さんご自身、コミュニティナースの活動を最初はボランティアの形ではじめたけれど、途中で継続が難しくなってきた、というお話を先ほどされていてと思います。活動の内容が必ずしもやりたいことばかりでない時に、しんどくなることってあると思うんですよね。地域福祉の持続性・継続性を考えた時に、人の善意や主体性だけに頼るのってなかなか難しいと思うんですよね。西部ガスさんは今回、事業の形でこのコミュニティナースプロジェクトに関わっていると思います。行政と比較しても企業は機動力があると思うのですが、しかし、経済合理性が求められる「企業」というものの中では特に内部か

らの理解を得るのが難しいんじゃないかと思っけています。せつかくなので、西部ガスの馬場さんからなにかコメントをいただけますか。

馬場さん：

企業ができることってすごく限られていると思っけています。コミュニティナースを実践する個人のいい兆しみたいなもの、” 火 ” が消えないように” 薪 ” をくべ続けることが企業の役割だと思っけていて。それは「場の提供」であったり、「資金の調達」であったり、コミュニティナースが持続可能に活動できる仕組みを整えることが大切かなど。Slidoの質問のなかでも「西部ガスは小松さんと足柄さんにどんなことを求めていますか？」という質問が上がっていましたが、こちらとしては純粋に、地域の住民さんにとって必要と思われるものをお二人には突き詰めてもらいたい、と思っけています。それを企業の言葉に変換して、企業として持続可能に取り組める活動にするのはこちらの役目だと思っけています。

こういう活動をしていると「西部ガスさんはCSR（企業の社会的責任）の側面での活動をやっているんですね」とよく言われるんですが、それは「はい」であり「いいえ」でもあるなと感じています。個人的には「はい」です。ただ、様々な情勢によって企業人として求められることも変化するという企業の難しさはやっぱりあります。そこで、誰がみても「いいね」と背中を押してもらえるように、土壌を作ろうと今頑張っています。地域の困りごとは現場に入っていないと見えてこないものなので、現場にいるコミュニティナースのお二人には住民さんの生の” 声や呟き ” を拾ってください、と伝えています。地域の人に喜んでもらえるようなサービス「今は世の中にないいけれどこんなものがあつたら嬉しい！」のアイデアを今後実現していけたらいいなと思っけています。

藤本さん：

かなり高解像度なニーズ調査をしていますね。アンケートやワークショップの実施だけでは拾えない、地域に伴走するなかでしか得られない、生活のなかのぼろっとした重要ななにかを拾っているのかなと思っけます。

小松さん：

単純に、住民のみなさんの「西部ガスへのイメージ」がすごく良くなるというのも実感しています。「こういった活動はどこが主催で行っているんですか？」とよく聞かれるので、西部ガスのことをその度に紹介しています。住民さんも、自分が利用している西部ガスさんを誇りに思っけてくれたり。住民の方が利用するサービスを選択するときに西部ガスを思い出したり、他社さんではコミュニティナース活動をきっかけに良い採用につながつたという話も聞きます。

藤本さん：

いや、明らかにそうだと思います。良い人材をどうやって企業として集めるかを考えるときに、本当の意味で社会貢献的なこと・公共的なことをしているか、本気でいい未来をつくろうという姿勢で企業経営をしているかとか、そういったさまざまな角度で見て自分が関わる企業はどうかを考えるのが大事かなと思っけますね。想いを持って時間をかけてその活動に取り組んでいるんだ、ということを表明していくってすごく大事ですよ。

※西部ガスグループビジョン2030の紹介は、下記記事をご参照ください。

<https://hd.saibugas.co.jp/ir/strategy/sgvision2030/>



小松さんに相方の足柄さんから質問！回答を隣でメモしています（笑）

——会場みなさんに、今回初めてコミュニティナースを知った方がトーク聞きながらどんなこと感じたかを聞きたいですね

藤岡さん：

久留米市社会福祉協議会（以下、社協）の藤岡と申します。「土地を知る」って大切だなと感じました。コミュニティナースのお二人のフィールドワークのお話を聞いて、災害を思い出したんです。令和5年の災害のとき、社協の災害ボランティアセンターも関わったんです。わたしが担当していた場所はかなり被害の大きいエリアでした。当時エリアへ足繁く通ったときに、それまで知らなかった道や知らないお店もあって。行くことでエリアのことを知って、現地ですべて話することでまちの人からの受け入れがとても良くなったんです。「あー、あのお宅ですね」と話せるだけで、「知っとると？」と反応が全然違ってくるので、こういう” 現地に行くこと ”って大切だなって当時から思うようになりました。何かをしに行くというよりも、知っていることによってそこに関係性が生まれるなど。「何かサービスをしにきてる人」ではなくて、「一緒に何かする人」という認識を持ってもらうって大事だなと。

以前に、なにかの本で「安心して孤独でいられる」というフレーズを見ていいなと思った事がありました。孤立でなくて、孤独。1人でやってもいいし、誰かともいつでも繋がれるような地域になったら理想なんだろうなって思いました。

—————

藤岡さんの素敵な感想で前半の会は終わりました。ここで、小松さんから、北海道の更別（さらべつ）村にて近々、コミュニティナーシング講座も予定されているとご紹介がありました。

気になる方は、下記のリンクをご覧くださいと思います。

<https://cncinc.jp/news/186>

プロジェクト、どんな感じ？



ナンバーソンカードの具体的な形が見えてきた！？

深掘りタイム終了後は、DAY 2 から始動した5つのプロジェクト（PJ）（「まちにひそむケアをさがすPJ」「ボランティアフェスアップデートPJ」「AU-formalフクフェスPJ」「ナンバーソンカードPJ」「かんちゃんと一緒に！PJ（食×ケアの探求）」）のメンバーごとに分かれて、現状の共有や日程が迫ってきたフェスティバル等のイベントに向けて具体的な話し合いが行われました。近日中に開催されるフェスティバルが2つあるので、ここで少しご紹介します。

■ FUKU FES（フクフェス） ※すでに終了しています

開催日：2026年2月8日（日）10:00～15:00

開催場所：津福公園（ドーム周辺）

概要：「叶え合う支援」を掲げるAU-formal実行委員会主催のイベント。今年は8日開催ですが、元々2月9日（フクの日）に開催していました。”福祉×吹く”、人が共に生きる「地域共生社会」をシャボン玉に見立てて、当日はみんなでシャボン玉を吹きます！

詳細：<https://www.city.kurume.fukuoka.jp/1500soshiki/9041chifuku/3010oshirase/fukufes.html>

■ 第47回久留米市ボランティアフェスティバル（ボラフェス）

開催日：2026年3月8日（日）

開催場所：久留米市社会福祉協議会（久留米市総合福祉会館）

概要：久留米市のボランティア活動の紹介や交流を行うイベント。内容は現在更新中！

詳細：https://www.instagram.com/kurume_volafes/

今回この講座をきっかけに始動した5つのプロジェクトが、さまざまな形でボラフェスに関わるかも！？

「まちにひそむケアをさがすPJ」では、メンバーそれぞれが1週間に1枚、日々のまちのなかで見つけたケアの写真をグループチャットに共有し、メンバーみんなでケアについて深掘って探求する活動をしています。現時点で40枚近くの写真が集まっているよう。この写真たちがボラフェスで展示されているかも？

「ナンバーソンカードPJ」は、この「ケアするローカル研究所 in くるめ」の参加者さんの中から「この人をぜひカードにしてほしい！」をアンケートで募集して実際にカードをこれから作っていく様子（今回の会の冒頭にみんなでアンケートに回答しました！）。このカードがもしかしたらボラフェスで登場するかも？

「かんちゃんと一緒に！PJ（食×ケアの探求）」も、上記2つのPJと同様に、ボラフェスとのコラボ企画を模索中です！子ども食堂への視察など、具体的なアクションを検討している様子でした。



それぞれのPJごとに集まって話し合い中。ワクワク楽しい時間に。

着々と準備が進んでいる様子が各PJごとに見受けられ、後半の共有タイムもワクワクする時間となりました。いよいよ次回は最終回！！最終回DAY5は、3月10日（火）に久留米ガス株式会社にて開催されます。なんだか寂しい気持ちも、、。次回も素敵な時間になりますように！

▼ケアするローカル研究所 in くるめ 市サイト

[久留米市：ケアするローカル研究所](#)